

木育(もくい)その2 ～木工道具改め、木と向き合うための道具～

岐阜県立森林文化アカデミー

松井 勅尚

「丸木小屋のかたわらのひと気のないところで、4歳4ヶ月の女の子が小さい斧をふりあげて、短い丸太を割ろうとしているのです。…ヘヤー(インディアン)のおとなたちのようすは、危ないと教えることよりも、子どもが早く自分でナイフを使いこなすようになることを重視しているように見えるのです。」※1

●トントンギコギコはいつから?

皆さんはこの文章を読みどう思いましたか?「4歳4ヶ月」と言えば保育園幼稚園の年中。私は木育研修で「大人の願いは国や地域によって違う。では、私たちはどう育みたいのか?」現場の先生たちと共に考えるきっかけとして引用してきました。しかし、意識の何処かに「この内容は日本の子どもたちには無理である…」との思いがありました。

平成22年度から3年間、林野庁補助事業として『就学前児童及び保護者を対象とした木育カリキュラム開発』※2を地元の保育園の協力のもと卒業生たちと実施してきました。図I.IIのような活動を通して実感したことは、「日本の子どもたちには危険だ…無理である…」と決めつけているのは私たち大人の意識であるということです。一方で、若い保護者の木工体験は中学の技術家庭科での(ほぼ初めての)体験で留まり、その時購入した木工道具は、その後1度も目の見ることなく、倉庫の奥にしまわれているのが現状です。



図I. 年長児のクギ打ち作業



図II. 年長児のノコギリ作業

●木の玩具の自給率は1%

ご存じのように岐阜県の森林率は全国第2位、82%の森林率を誇り、私たちは他県に比べ、もっとも森の中に住む日本人と言えるでしょう。また、飛騨の匠の技を今に伝える家具産業(机・椅子等)の出荷高は、全国第1位であります。しかし、木の玩具の自給率はなんと1%。岐阜県もその例外ではないでしょう。木の玩具は、子供たちが初めて触れる道具です。私たちは子どもたちに何を伝えたいのでしょうか?

●保育園でつかう杉の箱イスづくり

今、子供たちが保育園で3年間使うイスづくりを年

長の最終プログラムとして実施中です。3年目の集大成として、専門家に頼らず、保育士自ら教えることも目指しています。杉は柔らかくイスの材料として向いてないと言われてきましたが、今回は杉を使うことにしました。杉の「軽くて柔らかい」という性質が、園児にとって自分の力で運び、自分で加工することを出来るようにしてくれるのです。保育園と相談しながら進めていることは、技術力のある年長の子供たちが、入園してくる年少のためにイスをつくり、卒園して行く流れです。毎年毎年、感謝を込めてイスをつくる…その木と心の循環をつくりたいのです。

●木と向き合うための道具

人間は身近な自然を使い道具をつくり、地球上の他の生き物より、力強く生きてきました。私たちにとっての身近な自然は森であり、その木を使って生活してきました。

木は土のように素手では太刀打ちできません。木をきる道具『ノコギリ』。木をつなぐ道具『クギとカナヅチ』※3。これらは木工道具(大工道具)と言われます。私たちは一度刷り込まれたことから、なかなか抜け出すことが難しい生き物です。これらノコギリ等はそのことにより、とてもハードルの高い道具となってしまっています。いっそのこと「木と向き合うための道具」とらえ直しては如何でしょうか?ハサミやノリのように、子供たちが自由に使うことができた時、初めて木が身近なものになり、山や森への意識が変わるのではないかと考えています。

「子供に自然体験を!と昆虫を捕まえたり、畑で野菜の種類を教えたり、田植えをさせたりボーイスカウトのキャンプに参加させたりしましたが、木については、一度も触れさせたり、教えたりしませんでした。今回、木育の講義を受け、木について、子供たちに話したことがないことに気づき衝撃でした。」これは親子木育体験に参加された方から頂いたコメントですが、この言葉は特別な保護者の言葉ではないように思います。

日本でもっとも森の中に住む岐阜だからこそ、木について子供たちに話し、木でつくる機会をつくり、森を宝と意識できる人材を育む必要があるのではないのでしょうか?

※1 原ひろ子著「子どもの文化人類学」

※2 日本グッド・トイ委員会・筑波大学との共同研究

※3 カナヅチ:木工で使う金槌は玄能(ゲンノウ)と呼ぶ

●詳しい内容を知りたい方は

TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー まで